



小児がんフォローアップ研究助成
シンポジウム2019

標準復学支援要領の患者向けリーフレットの 作成とその有用性・効果の検証

○後藤 清香
松本 公一
鈕持 瞳
塩飽 仁
武田 鉄郎
副島 賢和
日下奈緒美

国立成育医療研究センター
国立成育医療研究センター
国立成育医療研究センター
東北大学大学院医学系研究科
和歌山大学大学院教育学研究科
昭和大学大学院保健医療学研究科
千葉県立松戸特別支援学校

小児がん患者の復学支援の背景①

小児がんの治癒率80%以上に上昇し、若年成人人口のうち
約400～1000人に1人が小児がん経験者 (石田, 2008)

小児がん患者の復学支援の重要性は認知され、議論や研究が
活発に行われ課題意識が広がりを見せている (大見, 2007)

病気療養児に対する教育の充実についての通知
「転籍手続きの簡素化や入院中の学習の充実化に向けた
対応の在り方」が示されている (文部科学省, 2013)

障害を理由とする差別の解決の推進に関する法律
「合理的配慮の提供を求めることによって障害のある人もない人も
共に暮らせる社会を目指す」が掲げられている (厚生労働省, 2016)

小児がん患者の復学支援の背景②

がん対策基本法 第21条

「小児がん患者における**学習と治療の両立のための環境整備と施策の必要性**」が掲げられている

(厚生労働省, 2016)

第3期がん対策推進基本計画

「小児とAYA世代のがん医療の充実」に向けて「**がん教育と普及啓発の整備の必要性**」が掲げられている

(厚生労働省, 2018)

小児がん拠点病院の指定要件

「患者の**発育及び教育等に関して必要な環境整備**」を掲げている
2018年の改訂では、高等学校の教育支援も追加されている

小児がん拠点病院に期待される役割

「患者とその家族に対する心理社会的な支援, 適切な療育と**教育環境の提供**」が示されている

(厚生労働省, 2015/2018)

小児がん患者の復学における課題

小児がん患者

病気に関する情報開示に戸惑う
(畑中, 2013)

学習の遅れ、クラス内孤立など仲間から取り残されることに恐怖や不安が高まる
(武田, 2006)

保護者

学校への頼みごとをためらう
(堀部, 2011)

学校への情報伝達不足によって必要な支援が受けられないことへの不安を抱く
(大見, 2010)

学校関係者

専門知識を学ぶ機会がない
(畑中, 2013)

医療者との連絡体制確立を要望する
(奥山, 2013)

合理的配慮の内容が分からない
(大見, 2008)

医療者

復学支援の方法やタイミングが分からない
(涌水, 2013)

復学支援の取り組みに消極的なことを認識している
(小堀, 2011)

復学支援の標準化に着目した研究がない

横断的・網羅的にカバーする支援策がない

標準復学支援がない

復学支援の均てん化と、その質の向上が困難

要領の開発手順

第1段階

- 文献検討と、復学支援の要素を時系列に示した「プロトタイプ」の作成

第2段階

- デルファイ法による「標準復学支援要領」の作成

第3段階

- 小児がん拠点病院の看護師を対象に「標準復学支援要領」の実行可能性について調査

第4段階

- 調査結果に基づいた「標準復学支援要領」の改訂

第1段階

医学中央雑誌web版

「小児がん」「慢性疾患」「復学」「学校」「原著論文」

過去10年間分を検出

検索過程で見出された有用な文献を加え、
研究目的に合致する39件

I .復学支援体制を醸成する時期

Ⅱ .小児がんを発症し入院した直後の時期

Ⅲ .小児がんの入院治療中の時期

Ⅳ .小児がんの入院治療を終えて退院前の時期

Ⅴ .小児がんの入院治療を終えて復学した後の時期

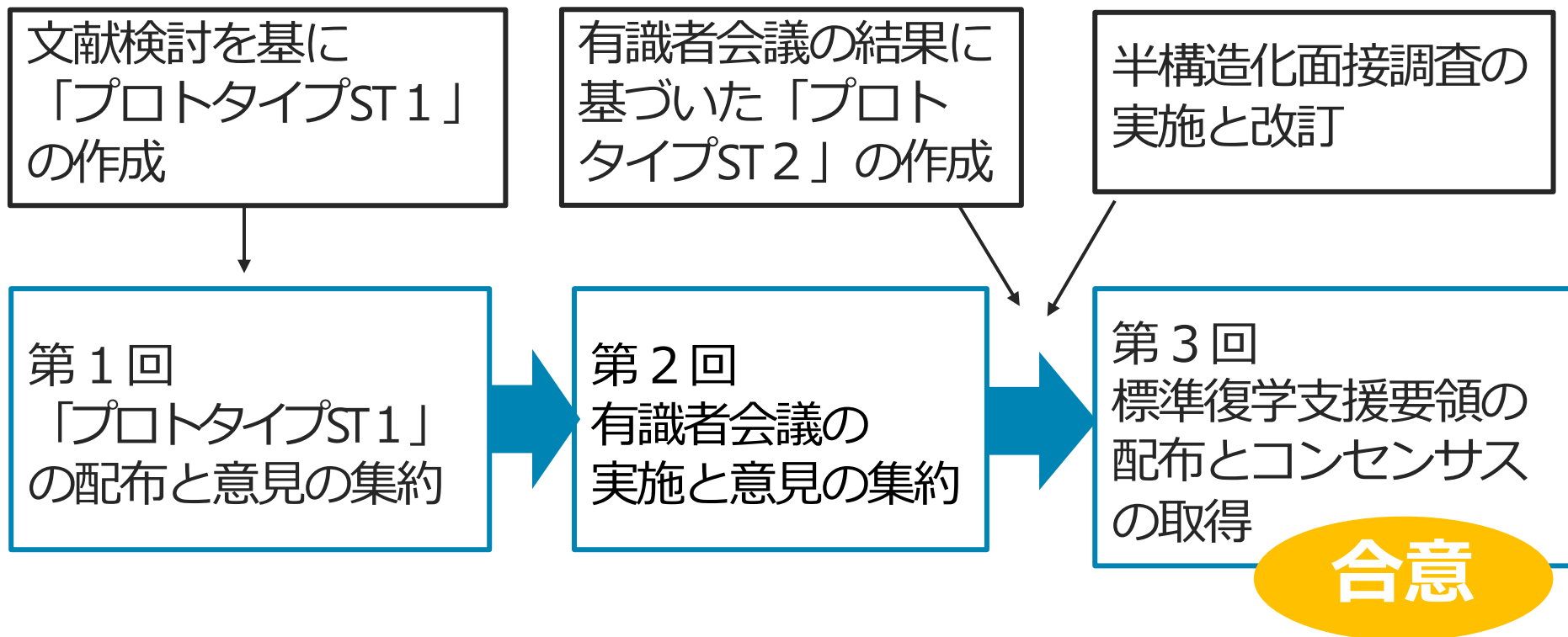
「誰が誰に対してどのような復学支援をするか」について
分類してラベル名とカテゴリ名をつけ、
小児がん患者の標準復学支援要領「プロトタイプ」を作成

第2段階

デルファイ法：診療ガイドライン等の作成時にコンセンサスを
形成するための方法
(上野,2012)

デルファイ法に参加する有識者

小児がん患者への**復学支援経験**があり、
小児がんの**医療と教育の研究実践**に携わる計5名を選出



第3段階

【対象】 以下の条件を全て満たす看護師とする

- ・ 臨床経験 5 年以上である
- ・ 過去10年で小児がん患児の復学支援経験がある
- ・ 調査時小児がん拠点病院に勤務している

指定要件「患者の発育教育に関して必要な環境整備」

- ・ 重要項目を発見できる可能性
- ・ 得られる知識に深みや広がりが増す可能性
- ・ 復学の重要性に関する意識が高く、関連サポートが多い

【調査方法】 半構造化面接調査

【調査内容】 要領の実用性、追記や修正した方が良い点

小児看護学研究者と小児看護経験のある看護師計5名で
合議し妥当性を確保

【倫理的配慮】 倫理委員会の承認を得て実施

第4段階

復学支援体制を醸成する時期

目的や基本的な考え方を
「はじめに」として
新たに作成

復学支援調整会議

会議の流れの一例を
一覧表として新たに作成

改訂内容の一部

個別支援が必要な場合

Good practiceを
コラムとして掲載

要領を
運用していくうえでの評価

研究目的

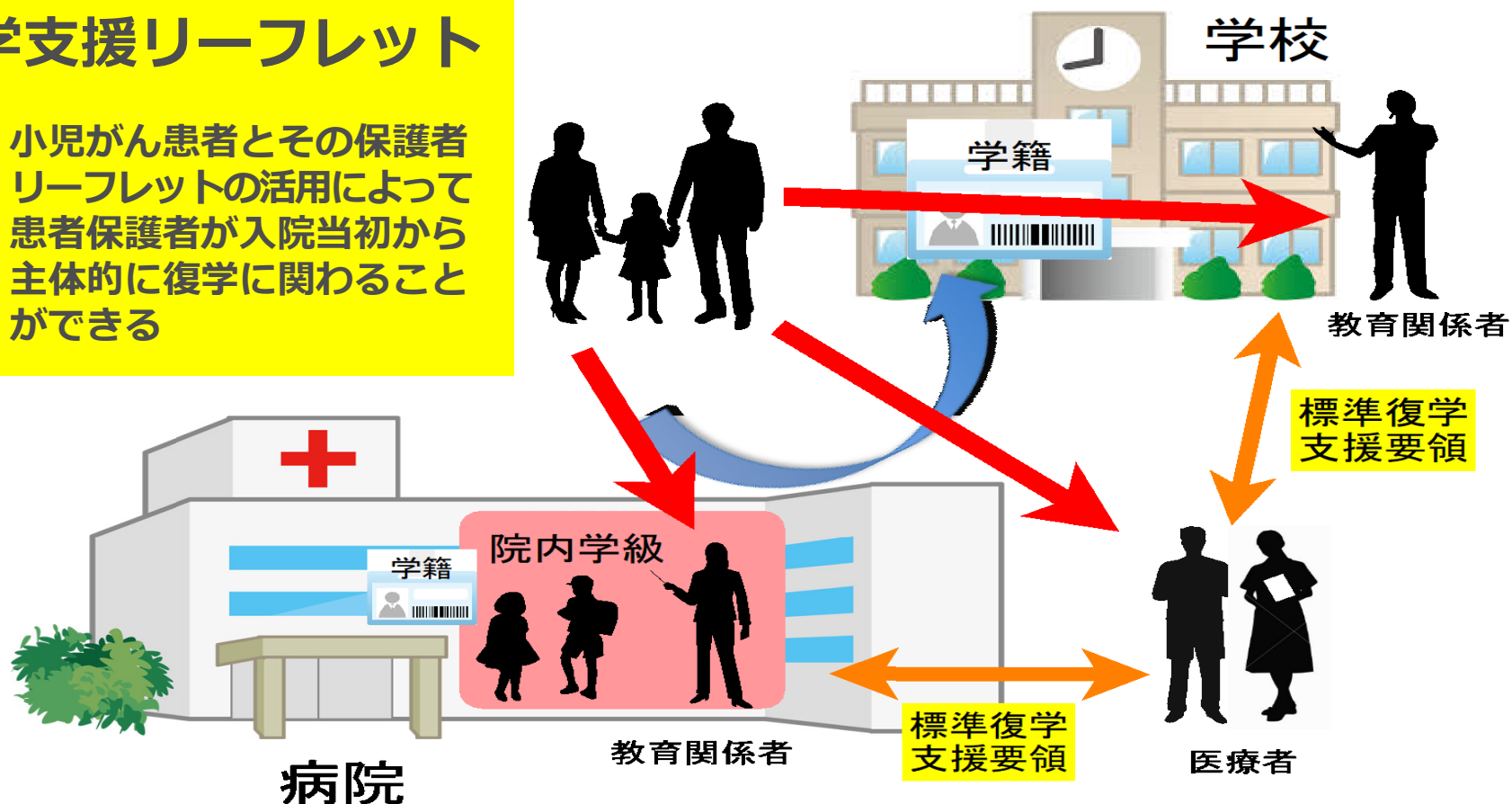
標準復学支援要領の患者向けリーフレットの作成、
その有用性と効果を検証し、リーフレットが、小児
がん患者および家族に対して復学の重要性の理解を
助けることに役立つようにすることを目的とする

研究の意義

復学支援リーフレット

対象：小児がん患者とその保護者

目的：リーフレットの活用によって
患者保護者が入院当初から
主体的に復学に関わることが
できる



患者と家族目線でリーフレット化することによって
全国の小児がん診療施設における**復学支援の均てん化が促進され、**
患者と家族が安心して復学できる社会の実現を期待できる

研究方法

1) 患者向けリーフレットの作成

【作成方法】 医師、看護師、教育関係者などにより
ワーキンググループを構成し、20ページ程度の
リーフレットを作成する

標準復学支援要領に挙げられた11の好事例につ
いては、より一般的な情報として提供することを
考慮する

2) 作成した患者向けリーフレットの有用性、効果の検証

【研究デザイン】 自記式質問紙調査

【対象】 小児がん拠点病院15拠点病院で研究期間内に入院または外来で診療されていて「病名告知を受けている小学校4年生以上の小児がん患者およびその保護者」で、主治医の許可があるうえで「リーフレットをモニターとして閲覧することに同意した者」とする

【時期】 2019年5月～2019年8月

【調査内容】 リーフレットの有用性と加筆修正した方がいい点
復学に関するエピソードなど

【倫理的配慮】 国立成育医療研究センターの
倫理委員会の承認を得る

調査対象者には、文書にて調査の目的と意義、
協力の自由意思、調査内容、調査の協力に
よって期待される利益および不利益、
プライバシーの保護および個人情報の保護方法
利益相反、公表方法などについて説明する
調査書への記入を以て、調査協力の同意を
確認する

【分析方法】 調査内容をまとめ、その結果に基づいて
リーフレットの内容を改訂保管し実行可能性を
高める

この過程は研究者らで合議し妥当性を確保する

結果

1) 患者向けリーフレットの作成

ワーキンググループメンバーの構成

氏名	所属部局	職名
松本 公一	国立成育医療研究センター	小児がんセンター長
鈕持 瞳	国立成育医療研究センター	副看護師長
日下 奈緒美	千葉県立松戸特別支援学校	教頭
武田 鉄郎	和歌山大学大学院教育学研究科	教授
副島 賢和	昭和大学大学院保健医療学研究科	准教授・院内学級担当

小児がん患者と家族が携帯しやすいようB5判見開き15ページとし、鉛筆等で書き込むことができるような素材とした

構成は「入院したら最初に行うこと」「退院前にやっておくといいこと」「復学支援調整会議とは」「もうすぐ復学するあなたの不安に対して」「みんなの声」などとした

入院中の教育の必要性について

小児がん患者さんと ご家族の皆さんへ



国立成育医療研究センター 小児がんセンター 編

はじめに

あなたは、小児がんと診断されてお気持ちが混乱されていることと思います。そんなときにはありますが、入院中の教育の必要性を少しでも考えていただけるよう、この冊子を作成しました。

日本のがん対策は「がん対策基本法」によって決められています。平成28年12月がん対策基本法の改正によって、小児がん患者さまが治療と学習を両立できるように体制整備が行われることが明記されました。

(がん患者における学習と治療との両立)

第二十一条 国及び地方公共団体は、小児がんの患者その他のがん患者が必要な教育と適切な治療とのいずれをも継続的かつ円滑に受けることができるよう、必要な環境の整備 その他の必要な施策を講ずるものとする。

小児がんの治療はとても大事ですが、同じように、入院中に学校へ通うことも、とても大切です。なぜならば、入院中も学校に通うことは、入院生活の大きな心の支えとなり、あなたが退院して社会へ戻ったときにあなた自身が困らないよう上手く適応するためのものです。

この冊子を活用することで、入院中も、退院してからも、順調に学校へ通うことができるよう皆様のお役に立てればと考えています。

国立成育医療研究センター 小児がんセンター長 松本 公一

目次

はじめに	1
あなたの病院の学習環境	3
院内学級とは	4
復学とは	4
入院したらあなたが最初に行うこと	5
前籍校とのつながり	6
あなたを支えてくれる人	7
退院前にやっておくといいこと	8
復学支援調整会議とは	9
もうすぐ復学するあなたの不安に対して	11
みんなの声	12
参考資料	14
本リーフレット作成者	14

あなたの病院の学習環境

- ☐ 病院内で学校や勉強について相談できる相手はいますか。
- ☐ 病院内に「院内学級」はありますか。
- ☐ その「院内学級」は、どんな種類でしょうか。
- ☐ 院内学級に通えない日でもベッド上で学習することはできますか。
- ☐ 病棟内に、学習できる場所や時間は確保されていますか。



院内学級とは

院内学級とは、広義には「病院内に設置された学級」のことをいいます。

特別支援学校の分教室や、小・中学校の特別支援学級を院内学級と呼びます。また特別支援学校の病院等への訪問教育を行っている場合にも院内学級と呼ばれることがあります。

いったい何が違うのでしょうか。

特別支援学校の分校の場合は、そこに在籍する生徒に対し教職員が配置され、事務職員も管理職もいます。

分教室の場合は、生徒数が本校の生徒と一緒にカウントされ、教職員の定数も学校全体でカウントされてしまいます。ですから、分教室に何人配置するかはその学校の判断となります。

一方、特別支援学級の上限定員は8人と定められているところが大きな違いとなっています。一人ひとりのニーズに合わせた教育が受けられるようになっていますが、特別支援学校の分校とは、少し違います。

復学とは

復学とは、お休みしていた学校に再び登校することをいいます。

入院したらあなたが最初に行うこと

- ☐ 勉強や学校について相談できる相手を見つける
- ☐ （院内学級に通う場合）相談できる相手の力を借りて、転籍手続きをする
- ☐ 院内学級の先生と話す時間を作る

長期入院が必要になると、いままで通っていた学校（前籍校といいます）に通って勉強することはできません。

院内学級は、そんなときでも、学習の機会、友達を作る機会、社会性を磨く機会などを失わないようにするものです。しかし、院内学級に通うためには、前籍校から学籍を移す（転籍といいます）手続きが必要になります。

これから新しく通うことになる「院内学級」、不安でいっぱいのことと思います。

一番大切なのは、あなたが院内学級の先生と話すことです。

復学に関して問題が発生してからや、退院がみえてから学校関係者や医療者と話すのではなく、入院したときから復学をみすえて、学校関係者や医療者間の関係を築いておくことが大事になります。

つまり、あなたの復学を支援する体制の基盤を作っておきましょう、ということです。

相談の窓口は病院によって異なります。まずは話しやすい医療者に声をかけ、相談の窓口を紹介してもらいましょう

前籍校とのつながり

入院したら前籍校に通えないからといって、前籍校とのつながりがなくなるわけではありません。

退院後には、また転籍手続きをして前籍校に通うことになりますので、入院中も前籍校の情報をしっかり収集しておくこと、前籍校にあなたの情報を伝えておくことが大事になります。

例えば

あなたが前籍校の情報で知っておいたほうがいい内容

学校行事、勉強の進捗状況、夏休み冬休みの宿題、クラスでの流行ごと

席替えしたときの座席やロッカーの位置、

新年度にクラス替えしたときのクラスや担任など

前籍校に伝えておいたほうがいい情報の内容

病気、治療内容、入院期間、体の状態、退院の見通し、復学の見通し、

病院での勉強の進捗状況、不安なこと、気になっていること、

お願いしたいことなど

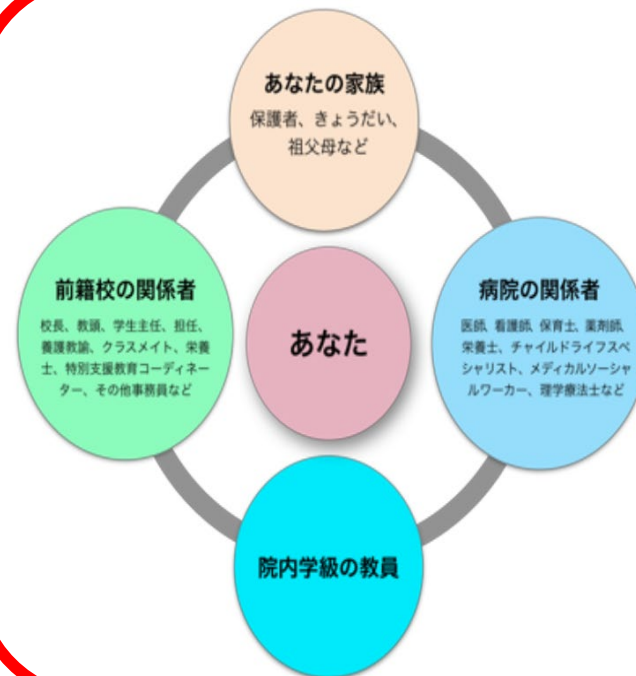
あなたを支えてくれる人

「勉強が遅れてしまうわ」

「受験はどうしたらいいのだろう」

「友達と離れてしまって大丈夫かな」

入院中は、たくさん不安なことがあると思います。あなたの周りには、家族、学校関係者や医療者など一緒に不安を解決してくれるたくさんの人たちがいます。まずは、その人たちと話してみましょう。



復学支援調整会議とは

復学支援調整会議とは、あなたの復学に関わる関係者が集まって、復学支援の方針について話し合いをする場のことです。

復学支援調整会議の内容の一例

	入院時復学支援調整会議
目標	復学支援に関わる関係者が復学支援の方針について共通の認識をもつ
開催時期	初期治療がひと段落した頃で可能な限り早い時期
参加者	【当事者】あなた、保護者
	【医療者】主治医、師長、病棟の担当看護師、メディカルソーシャルワーカーなど
	【学校関係者】院内学級の担当、前籍校の担任と養護教諭と管理職者（校長、教頭、学年主任など）、特別支援教育コーディネーターなど
話す内容	> 病気について（病気の種類、原因、治療方法、治療スケジュール、入院期間、復学の見通しなど） > あなたと学校関係者と医療者の連携の必要性、お互いに望む役割について > クラスメイトへの説明について > 相談窓口について

	退院前復学支援調整会議
目標	復学支援に関わる関係者が復学支援の方針について共通の認識をもつ
開催時期	退院2週間前から1か月前
参加者	【当事者】あなた、保護者
	【医療者】主治医、師長、病棟の担当看護師、メディカルソーシャルワーカー、外来看護師など
	【学校関係者】院内学級の担当、前籍校の担任と養護教諭と管理職者（校長、教頭、学年主任など）、特別支援教育コーディネーターなど
話す内容	> 病気について（治療経過、退院時期、復学の見通し、外来治療スケジュール、外来通院頻度など） > 治療が及ぼした影響について（脱毛、きず、疲れやすさなど） > 退院後の教員との連携の必要性、お互いに望む役割について > 学校での医療的対応について（医療的ケア、緊急時対応など） > 復学方法について（体力回復に応じて登校時間や学校行事への参加を増やしていくなど） > 感染症予防について（手洗いうがいの励行、感染しやすい状態時のマスク着用、流行性疾患患者と接触したときの対応など） > あなたが病気をどのように受け止めているかについて > クラスメイトへの説明について（外来通院の必要性など） > 入院や外来通院による学習の補完について（補修授業など） > 相談窓口について

あなたは、退院後も外来に通院します。この時期も学校生活と治療を両立させるための健康管理が必要になります。そのため、あなたと家族、医療者、学校関係者間の連携がとても重要になります。入院期間に築き上げた復学支援体制の連携を発揮しながら、体の状態に応じて学校生活を調整し、みんなが納得できる学校生活を送ることが重要になります。

つまり、退院してからも復学支援の継続が必要になります。

もうすぐ復学するあなたの不安に対して

クラスメイトと足並みをうまく揃えられない歯がゆさがあるかもしれません。

- ・長い入院だったからこそ、あなたが思うように行動できないこともあります。あせらずに、あなたのペースでクラスに馴染むようにしましょう。
- ・あなたが頑張っていることや得意なことをみつけましょう。
- ・「もっと頑張ろう」ではなく「よく頑張っている」というように行動を支持する言葉をいいかせましょう。
- ・自分に自信をもちましょう。

長い入院によって友人関係が変化するかもしれません。

- ・入院前は仲良かったのにちょっと長いブランクで、ギクシャクすることがあるかもしれません。
- ・友人関係が変化する理由（友人との距離感がある、話題についていけないなど）と一緒に誰かと考える機会を設けましょう。

学校生活における配慮事項が必要になるかもしれません。

- ・配慮してほしい内容を情報共有する機会を設けましょう。

例えば・・・

病気についていつ誰がどんな方法でクラスメイトに伝えるか

カツラをつけている場合は運動や着替えをどうしたらいいのか

座席の位置は前側の方がいいのか、出入口側の方がいいのか

科目ごとに移動教室がある場合は荷物や移動時間はどうしたらいいのか

体力が回復せず疲れやすいときはどうしたらいいのか

みんなの声

私が通っていた学校は県外で遠かったので、親の同意を得て、入院したときから前籍校の担任との連絡は担当看護師さんがメールでやりとりしてくれました。初めて小児がんの生徒を受け持つ前籍校の担任から担当看護師さんはたくさん質問を受けたそうですが、その甲斐あってスムーズに復学できました。（Aさん）

病院が準備してくれた退院パンフレットには、脱毛に関するクラスメイトへの説明として「私は髪の毛が抜けて悲しいけど、また生えてくるから見守っていてね」と書いてありました。それを読んだ私は「髪の毛が抜けたのは治療を頑張った証だから悲しくない。だからこんな書き方はしないでほしい。髪の毛が抜けた、だけにしてほしい」と医療者や親に伝えました。クラスメイトへの説明を患者本人が実際どうしてほしいかを確認することはすごく大事だと思います。（Bさん）

脳腫瘍の治療で何か月も入院していた高校生の僕は、復学しても単位がとれず進級できないかもしれない葛藤を抱えていました。だけど復学支援カンファレンスをして高校と話し合った結果、復学後の冬休みに補習授業をして進級させてくれました。僕は同級生たちと一緒に卒業することができて本当に嬉しかったです。（Cさん）

娘の復学はちょうど小学校入学のときでした。娘と私は小学校のイメージをもていなかったので退院前の外泊時に通学路を歩いてみました。通学路を実際に歩いたことで登校するイメージがつき、娘は、いよいよ学校に行くんだって自覚してくれました。(Dさんの保護者)

復学した中学生のEさんの外来受診に養護教諭も一緒に来院しました。養護教諭は予定されている修学旅行での注意点を医師や看護師に確認していきました。その後の外来受診時、Eさんは「修学旅行に参加できたよ。超楽しかった！」と報告してくれました。養護教諭から「修学旅行の全行程に無事参加できて安心しました」と連絡を受けました。復学後も学校と病院がつながっていることは大事だなと思いました。(看護師)

院内学級の自立活動の時間を使って、退院前の子供に「学校に戻って友達に病気のことをいろいろ聞かれたらどうするか、どんなふうに返答するか」というロールプレイをしています。復学した時に困らないような準備や対策は大事だから力を注いでいます。(院内学級教員)

参考資料

全国特別支援学校病弱教育校長会:病気の児童生徒への特別支援教育
「病気の子どもの理解のために」

http://www.nise.go.jp/portal/elearn/shiryoku/byoujyaku/pdf/pamphlet_2.pdf



国立がん研究センター小児がん情報サービス

<https://ganjoho.jp/child/>

公益財団法人がんの子どもを守る会

「がんの子どもの教育支援に関するガイドライン」
「小児がん経験者のためのガイドライン」よりよい生活を目指して—
「小児がん経験者のためのハンドブック」

http://www.ccaj-found.or.jp/materials_report/cancer_material/



本リーフレット作成者

松本 公一	国立成育医療研究センター 小児がんセンター長
後藤 清香	国立成育医療研究センター 小児看護専門看護師
釧持 瞳	国立成育医療研究センター がん化学療法認定看護師
塩飽 仁	東北大学大学院医学系研究科保健学専攻小児看護学分野 教授
武田 鉄郎	和歌山大学大学院教育学研究科 教授
副島 賢和	昭和大学大学院保健医療学研究科 准教授・院内学級教員
日下 奈緒美	千葉県立八千代特別支援学校 教頭

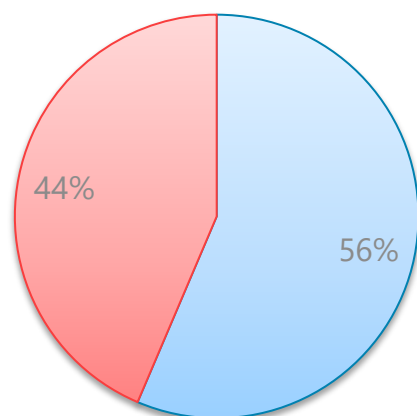
2) 作成した患者向けリーフレットの有用性、効果の検証

倫理委員会の承認を得るまで時間がかかり2019年5月から調査を開始した
2019年6月現在も調査は継続中であるため、調査結果の一部を報告する

調査紙配布数53部、回収数40部、回収率75.5%

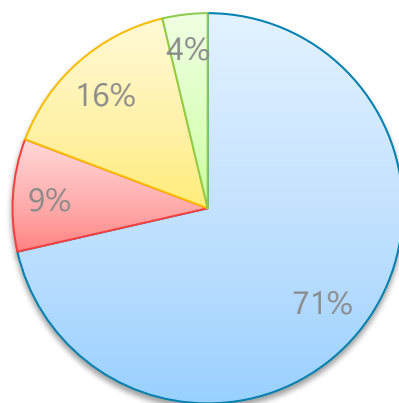
①対象者の背景

回答者の立場



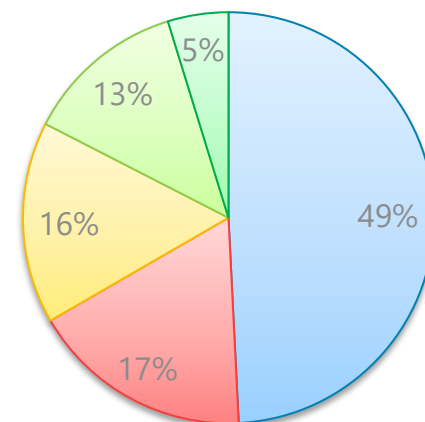
■ 保護者 ■ 患者

病気の種類

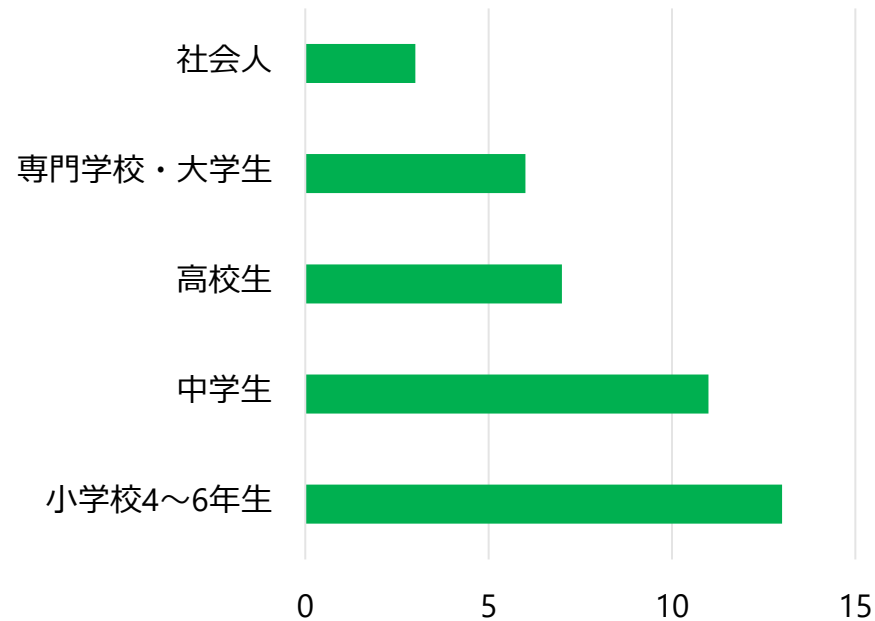


■ 血液腫瘍 ■ 固形腫瘍

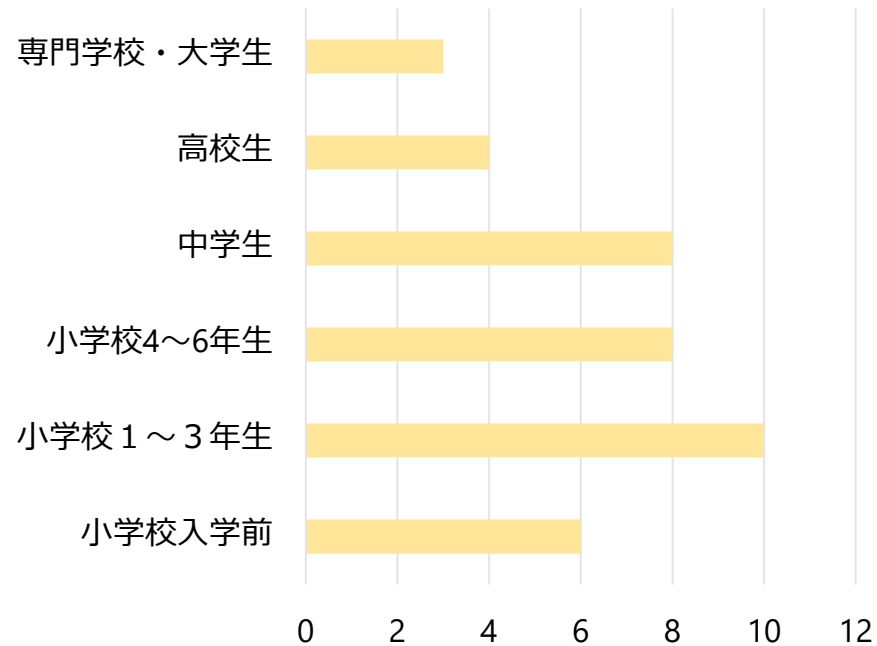
治療内容



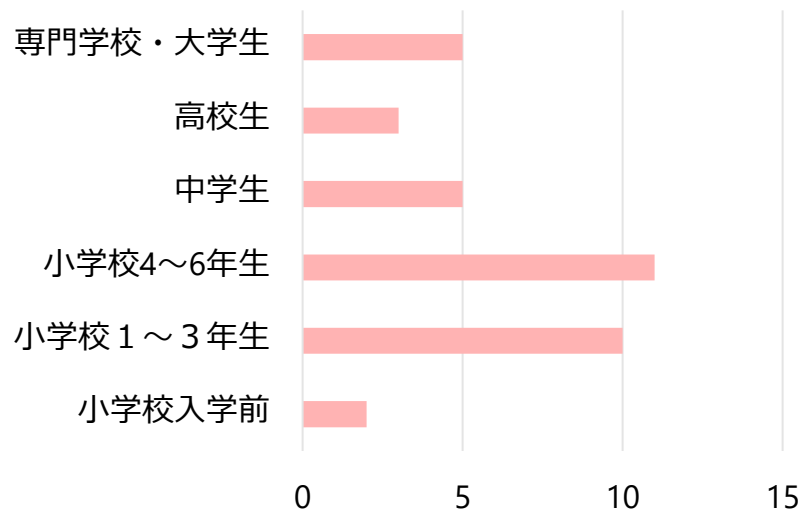
■ 化学療法 ■ 放射線療法
■ 造血幹細胞移植 ■ 手術療法
■ 分からない



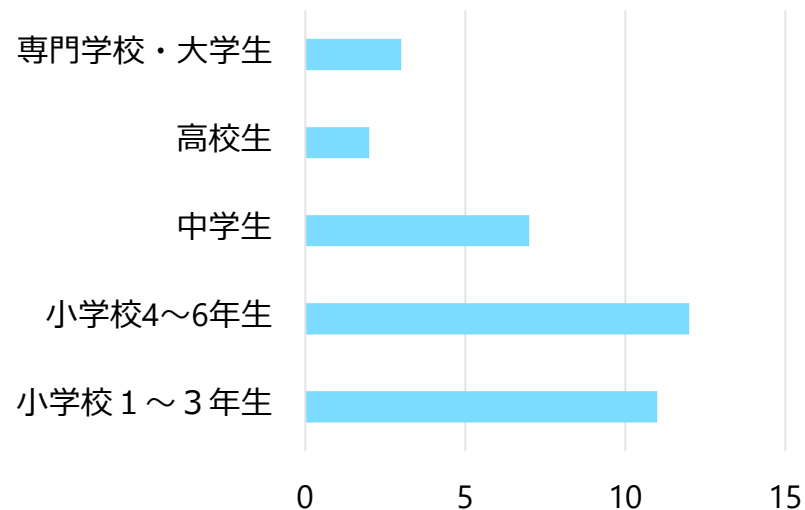
■ 現在の学齢



■ 入院治療開始したときの学齢

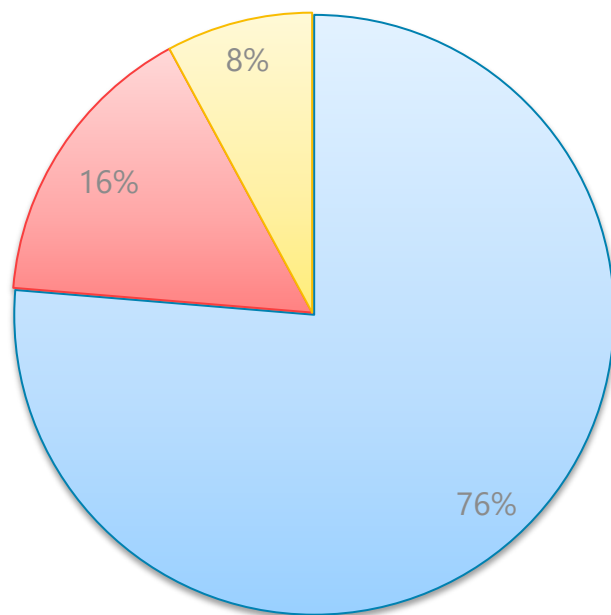


■ 入院治療終了したときの学齢



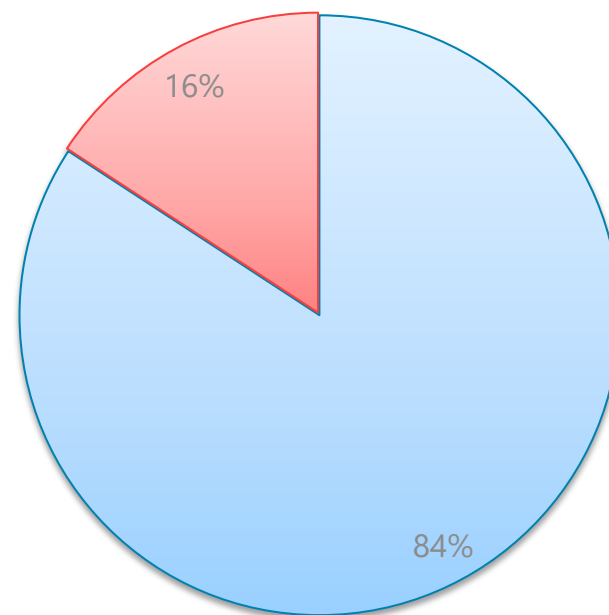
■ 登校を再開したときの学齢

復学支援を受けた経験



■ ある ■ ない ■ 分からない

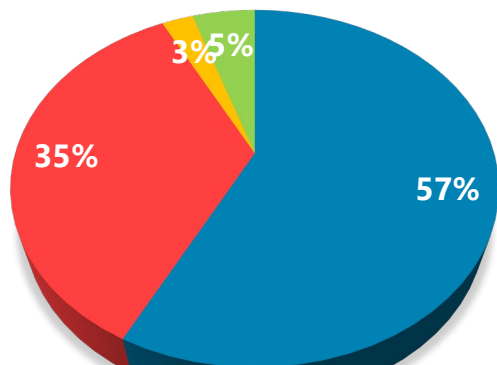
院内学級に通学した経験



■ ある ■ ない

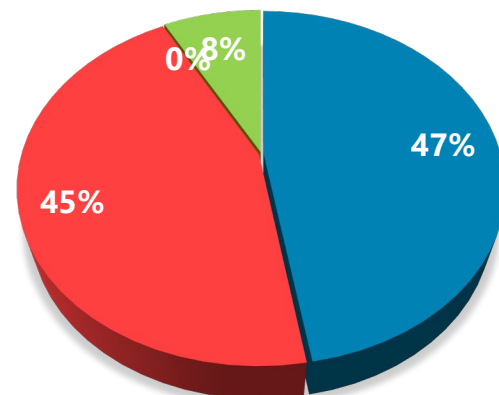
②リーフレットの有用性

役立つか



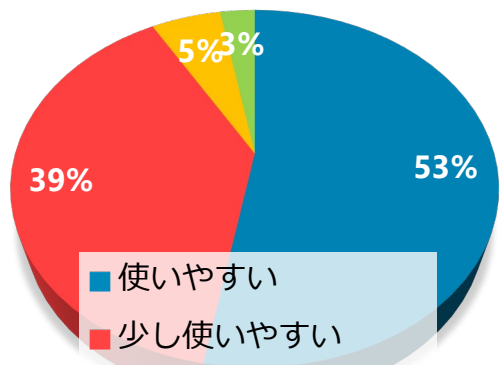
■ とても役立つ ■ 少し役立つ
■ 役立つ ■ 分からない

復学支援への意識が高まるか



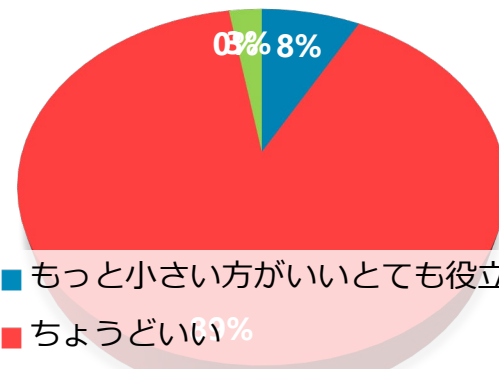
■ とても高まる ■ 少し高まる ■ 高まらない ■ 分からない

使いやすいか



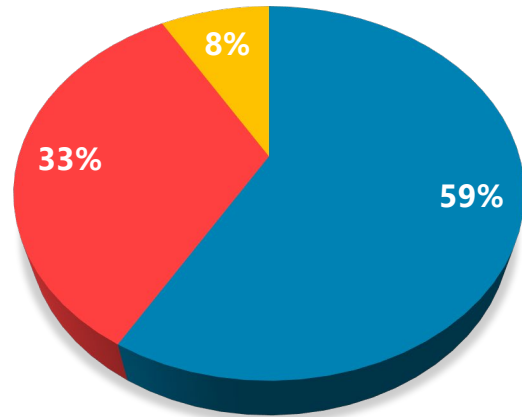
■ 使いやすい
■ 少し使いやすい
■ 使いにくい役立つ
■ 分からない

大きさ



■ もっと小さい方がいいとても役立つ
■ ちょうどいい
■ もっと大きい方がいい
■ 分からない

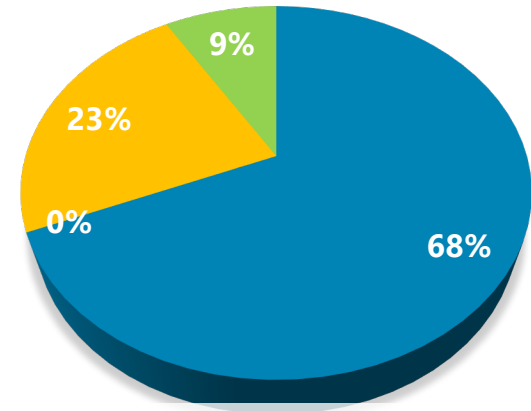
デザイン



- ちょうどいい
- もっと改善した方がいい
- 分からない

色の明るさ
イラストの活用
院内学級の写真の掲載
平易な言葉への変更
表紙のタイトルの変更

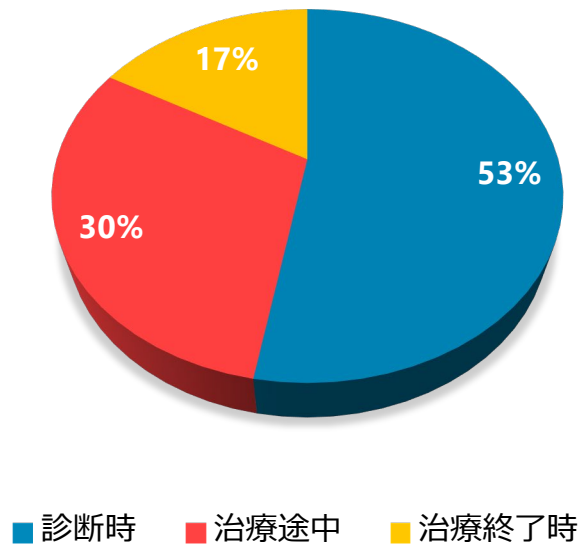
掲載情報



- ちょうどいい
- 不要な項目がある
- 追加したほうがいい項目がある
- 分からない

復学しなかった患者の意見
院内学級の時間割
院内学級の授業の様子
養護教諭との連携の必要性

配布時期



③リーフレットに関する意見や要望

“そもそも復学支援とは、どんな支援を受けられるのかがよくわからないので詳細に書いてあったほうがいい”

“この内容は小学生には難しいので、小学生用と中学生用に分けたほうがいい”

“表紙に「小児がん患者」と大きな字で書いてあるのは少しショックかもしれない”

“学校とのやり取りをする際に必要な確認事項が明確化され、子どもと家族が1つずつ確認できるような内容が望ましい”

“リーフレットを配って終わりにするのではなく、これをもとに口頭での説明やフォローが必要だ”

“当事者である「あなた」に向けて語りかけるページと、家族や保護者に語りかけるページを分けたほうがいい”

“治療は辛いけど、先のことをしっかり考えて入院生活を送るためにこのようなリーフレットは重要だ”

④ みんなに知ってほしい復学に関する良かったエピソード

卒業式の時期に退院した。髪の毛が生えそろっていないことや体力が少ないことから卒業式は欠席した。後日、卒業証書を受け取りに行ったら、私だけのために卒業セレモニーを短時間で開いてくれて感動した。

教室が4階なので上るだけで苦労した。担任に相談したら、教科書やノートは教室に置いていってもいいよと言われた。階段の踊り場に休憩用の椅子を置いてくれた。担任の心遣いに救われた。



脱毛のことが心配だったけど、病院スタッフがクラスメイト向けに作成してくれた資料のおかげで、クラスメイトも理解してくれ、いじめられずに済んだ。

学校の先生が学校行事のなかで「できないこと」ではなく「できること」「やらせたいこと」を考えてくれた。みんなに取り残されず参加できて嬉しかった。

考察

リーフレットは

- 具体的な復学支援の要素を含んだ内容であることから復学支援への意識が高まり、有用性の高さが示唆された
- 内容を平易にする、親しみあるデザインにするなど体裁を改善することで、さらに有用性は高まると期待できる
- あらかじめ医療者が内容を理解して患者と家族に説明しながら手渡すという
双方向コミュニケーションプロセスをとることが患者と家族の理解度の向上をもたらす

小児がん患者の復学支援は

のちの就労につながる重要な支援と考えられるため
このような支援に対する公的なインセンティブがあると、
より一層効果的な支援につながる可能性がある

結論

- 入院中の教育と復学の重要性について
小児がん患者さんと家族に向けたリーフレットを作成した
- 精錬されたリーフレットの普及によって、
小児がん患者さんとその家族が入院中から教育の
必要性を理解し、安心して復学できる社会の実現
を目指すことができる

今後の計画

調査の継続

調査紙の回収と分析

リーフレットの改訂と普及活動

調査結果に従った改訂

時勢に合わせた改訂

好事例の掲載

全国の小児がん診療

連携病院への配布

WEB上への掲載

関連学会での公表

発展

患者さん家族も利用可能な復学支援のアプリケーションの開発

最後に

小児がん患者さんの復学支援の質の向上に向け、
本助成を通し、この取り組みを一層と加速したいと
思います

認定NPO法人ハートリンクワーキングプロジェクト
の皆様にご心より感謝申し上げます

ご清聴ありがとうございました

